

・天保十三年（一八四二）

二月十九日 諸生遊山。放学。午牌與棗園。鉄之助。及家人婢使。散行觀花。順三郎從行。詣黒男祠。遊岳林寺。憩於竹中安兵衛店。（略）發行厨。其家亦供酒飯。申牌帰家。是日天氣清明。彼岸桜正開。未及他花。

などである。

黒男祠は羽野天満宮で述べた「坂迎え」にかかわって、筑後方面への旅の行き帰りの送迎の場ともなっていたようである。例えば天保十三年（一八四二）の淡窓の大村行からの帰りにあたっては、

十二月二日朝。石井新作力招ニ応ズ。新作ハ和一郎カ兄ニシテ、吉井ノ大庄屋ナリ。伊織・祐之從行セリ。ソレヨリ古賀氏ニ至リ、從母ノ病ヲ訪フ。先日ノ腫物、近比潰エタル由ニテ、床ニ臥シ玉ヘリ。氣力ハ疲レタレトモ、苦痛ノコトハ無シトソ。吉井ノ諸子、皆街口マデ送リテ別レタリ。千束町ニ到リテ宜園ノ諸生数人來リ迎ヘタリ。介石其冠タリ。魚屋隆助ヲ訪フ。止メテ酒ヲ饗セントス。辞シテ去リシニ、轎ノ中ニ杯ヲ持チ來リテ、数杯ヲ勸メタリ。限上ヲ過グ。玉井養純、浅井恒吉、出テ迎ヘテ。茶菓ヲ饗ス。保木ニ到ル。諸生数人、此處ニ相マテリ。長谷ニ到ル。範治、諸生十余人ヲ卒キテ來リ迎フ。一店ヲカリテ、齋ス所ノ行厨ヲ發シテ、予ニ差ム。時ヲ移シテ出ツ。入江ノ浮橋ニ到ル。棗園、鉄之助、五郎兵衛、元春來リ迎フ。黒男祠ニ至ル。家人皆此庭ニ在リ。茂、石舟モ其中ニ在リ。又行厨ヲ發シテ飲宴ス。暮ニ及ンテ家ニ達ス。饗応ヲ設ケタリ。

とある。

これによれば、淡窓の大村からの帰途、筑後の「吉井」では門人の兄である大庄屋石井新作の迎えうけたが、吉井を發つとき門下生諸子が町口で見送った。そして隣の「千束」では門人とその家族が迎えた。さらに日田郡に近い「保木」では門生数十人が出迎えている。日田の地までなお距離を残すこれらの地での、道々の歓迎ぶりはただ驚くばかりである。普段、

日田の地を出ることの少なかった淡窓師が、それぞれの門下生の郷里を通るのである。大挙して迎える姿に、門下生の師への深い尊敬と思慕が見えるようである。

その後、淡窓一行は日田郡域に入るが、まず「長谷」では範治が門生十余人を率いて迎え、ここで行厨を開いている。そして「入江」の浮橋には棗園、鉄之助、五郎兵衛、元春が出迎えた。ここから、さらに歩いて、いわば最後の出迎えの場となったのが、他ならぬ黒男祠である。

ここには家人皆集まつて行厨を開いた。そして無事に帰宅、ここでも饗応が行われるのである。まさに門人、家族総出での出迎えであった。

星隈山（図1・33）

盆地の西部では星隈山とその周辺にも足を運んでいる。

・天保二年（一八三一）

一月十七日。謙吉、東雄、轍、春棟、俊亮ト散歩シテ三郎丸ニイタル。星隈ニノボル。小山ナリ。永山ヲ月隈、龜山ヲ日隈、此地ヲ合セテ三限ト称ス。但シ此地ハ其説、明白ナラツ。其規模ニ限ニ比スレハ小ナリ。山上ニ神祠アリ。此ニ息フテ行厨ヲ開ケリ。余、詩アリ。

星隈山はいまでもなく日隈山、月隈山と並んで日田の三限と呼ばれたところである。山上には星隈神社があり、全山雑木に覆われ、山脚は花月川に臨み、三隈川との合流点を見ることが出来る。山腹には数十の横穴古墳があり、山麓には大型の横穴式石室を持つ三郎丸古墳がある。



星隈山